

平成25年度 公益社団法人日本造園学会関東支部大会 事例・研究発表賞表彰

2013.10.27

	口頭発表部門	ポスター発表部門
最優秀研究発表賞	千葉県の千年村と限界集落の立地に関する比較研究 高橋大樹・梶尾智美・木下 剛・池邊このみ	群馬県川場村における「わが村わが庭構想事業」の活動 小沼康子・松本恵樹・鈴木 誠・鈴木忠義
優秀研究発表賞	主要緑化用芝草による放射性物質のPhytoremediation能の解明に関する実験的研究 祁 吉強・近藤三雄・水庭千鶴子・浅井俊光	災害復興におけるコミュニティガーデンの役割:ニューオーリンズ市の事例より 新保奈穂美
〃	都市公園における木質バイオマスを活用したガス化発電に関する実証実験について 曾根直幸・山岸 裕・栗原正夫・大場龍夫・河野良彦・根本泰行	地域自然保全型緑地計画の試み - 神奈川県寒川町を対象として - 葉山嘉一・飯塚 智
〃	国立公園の選定における田村剛の視覚 水内佑輔・田邊徳子・古谷勝則	
奨励賞	個人庭園における地上型3Dレーザスキャナによる計測と平板測量との比較 金井大輔・國井洋一	旧齋藤氏別邸庭園の学術調査と保存管理・整備基本計画の作成 石井隆行・松本恵樹・村田亮介・諸井敬介・粟野 隆・鈴木 誠
〃	水戸藩駒込邸庭園の造園と借景に関する一考察 原 祐一	石造美術品の記録と評価に関するフィールドワーク 江戸東京の庭園調査から(中間報告) 荒井まゆ・島田真以子・竹内竜真・粟野 隆
〃		工場緑地の管理運営におけるマネジメントシステムに関する研究 近藤隼人・曾根大樹・柳井重人
特別賞	東京ガス環境エネルギー館屋上ビオトープの15年間の変遷とその管理、および活動成果について 鈴木 創・嶋野 弥名子	

第1会場

＜口頭発表＞ 9:30～ 発表時間1題 12分 質疑・交代時間 3分

1号館211教室

座長

9:30～ 9:45

1 天理教大教会の伽藍配置と造園空間の特質

大澤 達也・栗野 隆

9:45～10:00

2 引佐町久留女木の棚田の水の利用形態と耕作者の関係について

小林成彦・荒井歩

10:00～10:15

3 近代茶人・3代木津宗詮(聿斎)の人と作品

安田 孝治郎・栗野 隆

10:15～10:30

4 「擬木」という呼称について考える

栗野 隆

島田 知幸
(都市再生機構)

10:30～10:45

5 中国の桜と桜名所に関する一考察

謝 茉ハン・鈴木 誠

10:45～11:00

6 飛騨高山における神社境内の社号標石の形状に関する研究

小林 章・國井 洋一

11:00～11:15

7 近代の東京を代表する庭師・松本亀吉の経歴

松本恵樹・正田実知彦・鈴木 誠

11:15～11:30

8 整備地と山の境界における排水対策に関する研究
—乗谷朝倉氏遺跡を事例として

小堀貴子・赤坂 信

大橋 尚美
(戸田芳樹風景計画)

第2会場

<口頭発表> 9:30～ 発表時間1題 12分 質疑・交代時間 3分

1号館212教室

座長

9:30～ 9:45	1 みんなのスクールバスを走らせよう — 山形県山形市立蔵王第一中学校学区 — 間中友季子・高梨 武彦・中村 良三	浅井 俊光 (東京農業大学)
9:45～10:00	2 森林環境税による森林マネジメントに関する研究 — 秋田県、神奈川県を事例として — 安田 知理・秋田 典子	
10:00～10:15	3 植物園観賞温室の展示に関する考察 作田 裕花・堀江 典子・平松 玲治・熊谷 洋一	
10:15～10:30	4 効果的な緑の除染作業を進めるための「放射線量率の方向寄与率」の測定 茂木道教・水庭千鶴子・近藤三雄	
10:30～10:45	5 住建築物の屋上空間における薄層緑化と太陽光発電パネル設置との熱的特性の比較 田中陽子・浅井俊光・近藤三雄	葉山 嘉一 (日本大学)
10:45～11:00	6 のり面等の遮染・侵食防止・植生の再生工法の提案 — 自然環境地域仕様 — 近藤 三雄・水庭 千鶴子・本多竹三郎・雨貝 洋	
11:00～11:15	7 「のり面の遮染・侵食防止・植生の再生工法」の有用性の検証に関する現場実験 近藤三雄・水庭千鶴子・浅井俊光・本多竹三郎・雨貝 洋・茂木道教	

第3会場

〈口頭発表〉 9:30～ 発表時間1題 12分 質疑・交代時間 3分

1号館213教室

座長

9:30～ 9:45

1 千葉県千年村と限界集落の立地に関する比較研究

高橋大樹・梶尾智美・木下 剛・池邊このみ

9:45～10:00

2 加藤誠平による橋梁美学の成立背景

横関隆登

10:00～10:15

3 造園作品の時間経過による景観変化に関する研究

岡本直子・鈴木 誠

10:15～10:30

4 ランドスケープ特性評価手法を用いた関東甲信越地域の
ランドスケープ多様性分析

芮 京祿・水内佑輔・野嶋太智

町田 怜子
(東京農業大学)

10:30～10:45

5 阿蘇くじゅう国立公園阿蘇地域における草原再生と森林
整備による景観管理の現状と課題

町田怜子・下嶋 聖・粕川玉青・中村 駆・麻生 恵

10:45～11:00

6 国立公園の選定における田村剛の視覚

水内佑輔・田邊徳子・古谷勝則

11:00～11:15

7 自然公園のシーケンス景観に対する画像解析による経
年比較

國井洋一

11:15～11:30

8 神奈川県内の小学校校歌歌詞から抽出された風景要素と
動植物の名称

藤崎健一郎

栗田 和弥
(東京農業大学)

第4会場

〈口頭発表〉 9:30～ 発表時間1題 12分 質疑・交代時間 3分

1号館224教室

座長

9:30～ 9:45

- 1 首都高速大橋ジャンクション「目黒天空庭園」で試みられた他に類例のない仕組みと技術

近藤三雄・三間慎啓・佐藤健二

9:45～10:00

- 2 第一線で活躍する造園家から見た造園事業や造園の基本問題についての評価

近藤三雄・飯塚隼弘

10:00～10:15

- 3 スコットランドのフットパスにみる観光まちづくりの実態に関する報告

押田佳子

10:15～10:30

- 4 市民による公園の管理における効果と課題
-
- 一町田市と松戸市の街区公園を対象として一

渡辺彩花・秋田典子

高橋 俊守
(宇都宮大学)

10:30～10:45

- 5 公園デザイン評論の必要性について

新畑朋子

10:45～11:00

- 6 東京ガス環境エネルギー館屋上ビオトープの15年間の変遷とその管理、および活動成果について

鈴木 創・嶋野 弥名子

11:00～11:15

- 7 ブルーノ・タウトのブリッツ馬蹄形集合住宅の配置と中庭の設計意図に対する居住者意識

小木曾裕

11:15～11:30

- 8 イチヨウの伝承に関する基礎調査

近江慶光・長澤美穂

押田 佳子
(日本大学)

第5会場

〈口頭発表〉 9:30～ 発表時間1題 12分 質疑・交代時間 3分

1号館223教室

座長

9:30～ 9:45

1 東京都の文化財庭園等における景観破壊の現状とその要因

菊池 瞳・栗野 隆

9:45～10:00

2 小石川後樂園の園路についての考察

佐竹真一・高崎康隆・高梨武彦

10:00～10:15

3 個人庭園における地上型3Dレーザースキャナによる計測と平板測量との比較

金井大輔・國井洋一

10:15～10:30

4 京町家に代表される「坪庭」のデザインと涼気生成効果との関係の解明に関する実証的研究

孫瑩軒・近藤三雄

服部 勉
(東京農業大学)

10:30～10:45

5 日本におけるコミュニティガーデン活動組織の存続要件の検討

一宮崎コミュニティガーデンと今宿コミュニティガーデンを
山田佑香・秋田典子

10:45～11:00

6 米国・ポートランド日本庭園を中心としたマネージメント政策の現状

服部 勉・牧田直子・鈴木 誠

11:00～11:15

7 北アメリカの日本庭園にみる会員制度の現状

牧田直子・服部 勉・鈴木 誠

11:15～11:30

8 水戸藩駒込邸庭園の造園と借景に関する一考察

原 祐一

津久井 敦士
(三菱地所設計)

第6会場

＜口頭発表＞ 9:30～ 発表時間1題 12分 質疑・交代時間 3分

1号館222教室

座長

9:30～ 9:45

1 大町桂月の紀行文にみるランドスケープへのまなざし

齋藤 豊子・小沼 康子・鈴木 誠

9:45～10:00

2 リバプール市のグリーンインフラ戦略にみるグリーンインフラを実体化する手法とその意義

木下 剛・芮 京祿

10:00～10:15

3 経験や意欲別にみる緑地保全活動参加に対する市民の意識

高瀬 唯・櫻庭晶子・古谷勝則

10:15～10:30

4 風致地区制度における田園都市論の影響に関する考察

阿部伸太

10:30～10:45

5 練馬区東大泉・南大泉における小学生が自然体験可能と考える公園・緑地の分布

野澤拓実・古谷勝則

10:45～11:00

6 中国西寧市における学生の緑地の利用現状と印象

Tong Ama・古谷勝則・仙 珠

11:00～11:15

7 居住環境の品質表示を目的とする樹木緑被率分布図

池口 仁

11:15～11:30

8 三カ国にまたがるCMRダウル国際自然保護区について

韓 国栄・古谷勝則

池口 仁
(山梨県環境科学研究所)阿部 伸太
(東京農業大学)

第7会場

〈口頭発表〉 9:30～ 発表時間1題 12分 質疑・交代時間 3分

1号館221教室

座長

9:30～ 9:45	1 主要緑化用芝草による放射性物質のPhytoremediation能の解明に関する実験的研究 祁 吉強・近藤三雄・水庭千鶴子・浅井俊光	石井 匡志 (アゴラ造園)
9:45～10:00	2 芝草へのカリウム施肥による土壤中のセシウムの制御の可能性ならびに放射性物質の蓄積部位について 高井絵里・水庭千鶴子・近藤三雄	
10:00～10:15	3 供給可能量調査にみた公共用緑化樹木の生産実態 中山大豊・内田 均	
10:15～10:30	4 都市公園における木質バイオマスを活用したガス化発電に関する実証実験について 宮根隼辛・山岸 裕・柴原止大・大場龍大・河野良彦・根本泰行	
10:30～10:45	5 江東区における樹木害虫の総合防除の取り組みについて 清田秀雄	荒井 歩 (東京農業大学)
10:45～11:00	6 植物量と土壌微生物活性による緑地の「自然らしさ」の評価 高橋輝昌・岡崎 潤	
11:00～11:15	7 江戸川区親水公園・緑道の水の違いによる生き物の生息数と人に認知されている生き物の数について 佐渡 晋・古谷勝則	
11:15～11:30	8 東京都内における剪定枝を原料とした堆肥に含まれる放射性セシウムの推移 石井匡志・塩田哲児・長嶺利樹・荻野淳司	

- 1 写真画像に基づく緑のカーテンのLAI測定方法
加藤真司・持田太樹・島田知幸
- 2 東京農業大学収穫祭正門装飾について
野口直樹・芝山憲吾・下山大輝・栗野 隆
- 3 旧齋藤氏別邸庭園の学術調査と保存管理・整備基本計画の作成
石井隆行・松本恵樹・村田亮介・諸井敬介・栗野 隆・鈴木 誠
- 4 石造美術品の記録と評価に関するフィールドワーク
江戸東京の庭園調査から(中間報告)
荒井まゆ・島田真以子・竹内竜真・栗野 隆
- 5 「古田織部正殿闇書」から読み取れる古田織部の茶庭における特徴
奥川裕樹・服部 勉・入江彰昭
- 6 高村弘平資料の探求
中村友哉・稲葉さよ・栗野 隆
- 7 現存しない建造物に対する古写真を用いた3次元情報の取得について
坂本 遼・國井洋一
- 8 鎌倉市における文化財・景観・環境の計画と条例の関係
梶尾智美・張天然・白 琳・韓旻睿・池邊このみ・木下 剛
- 9 庭園の移設に対する地上型3Dレーザスキャナの利用について
猪狩里美・國井洋一・鈴木 誠
- 10 “ウォーカビリティ”から見た都市の評価に関する研究—港区南部を例に—
酒本翔太・橋本慧・譚 瀟洋・池邊このみ・木下 剛
- 11 都市郊外部における団地を核とした地域再生についての提案—
千葉県松戸市梨香台団地を対象として—
呉 垠錫・櫻井政志・真鍋千恵子・陳 洋・大野勝幸・池邊このみ・木下 剛
- 12 回遊式庭園における庭園建築の立地について
川名実緒・吉田しおり・田中由莉亜・高木啓徳・鈴木 誠

- 13 東京23区内の公開日本庭園におけるユニバーサルデザインに関する調査研究
出水美央・橋本胡桃・牧野翔太・鈴木 誠
- 14 武満徹の音楽と庭園
岡村悠子・伊藤亜莉・染谷 茜・鈴木 誠
- 15 庭園(的空間)によって有名な神社に関する調査研究
坂上友之・牛村奈緒美・千葉芙実・鈴木 誠
- 16 皇居東御苑 二の丸庭園の造園設計と施工
大石由美・井上佑己・岸田真太郎・鈴木 誠
- 17 東京都内のガーデンウェディングに関する調査研究
福永洋子・海津舞子・密山真子・鈴木 誠
- 18 「造園関連映像資料」(16mmフィルム・ビデオ・DVD等)リストと所蔵先
佐藤至門・上野優紀・名波早希・早川佳代・鈴木 誠
- 19 イスタンブール工科大学と東京農業大学との国際学生
ランドスケープデザイン・ワークショップ2013
岡本直子・祁吉強・謝業ハン・早川佳代・ブラク アクデミ・
阿部伸太・鈴木 誠
- 20 集合住宅におけるベランダ園芸志向動向の現在とベラン
ダ・ボックス・ガーデニング(BBG)の提案
塩原 匠・早川佳代・藤田昌志・藤田 茂・鈴木 誠
- 21 公共施設としての現代日本庭園に関する基礎的研究
高橋賢弘・牧田直子・鈴木 誠
- 22 群馬県川場村における「わが村わが庭構想事業」の活動
小沼康子・松本恵樹・鈴木 誠・鈴木忠義
- 23 屋上緑化空間の維持管理における管理者の意識に関する研究
煙山亜由美・河合勇樹・金甫炫・池邊このみ・木下 剛
- 24 東京都における壁面緑化の現況と制度の課題
北田周平・河合勇樹・金甫炫・斉心・池邊このみ・木下 剛
- 25 里山におけるマイカー規制に関する検討～長野県入笠山を事例と
荒木笙子・秋田典子
- 26 拡張現実感(AR)技術を用いた空間の構図検討に対するシミュ
レーションソフトウェアの開発
北村智史・國井洋一

- 27 地域自然保全型緑地計画の試み —神奈川県寒川町を対象として—
葉山嘉一・飯塚 智
- 28 都道府県と政令指定都市における指定管理者制度の導入状況
庄野廉平・古谷勝則
- 29 生物との共生を目指した建築物空間整備に係わる環境評価手法の実態に関する基礎的研究
鴨諸一・芳野晃弘・押田佳子・岡田智秀
- 30 災害復興におけるコミュニティガーデンの役割:ニューオーリンズ市の事例より
新保奈穂美
- 31 3Dレーザスキャナによる小田原城天守閣計測および木造化シミュレーション
小高智久・大戸 萌・國井洋一
- 32 3Dレーザ計測と温度計測との併用による幼児に対する熱ストレスの視覚化
辻麻由子・岸本育子・國井洋一
- 33 高齢化が進んだ郊外部の戸建住宅地における緑化活動の実態に関する研究
綿引稔・柳井重人
- 34 工場緑地の管理運営におけるマネジメントシステムに関する研究
近藤隼人・曾根大樹・柳井重人
- 35 臨海工業地帯における行政と企業との協働に基づく緑のネットワークに関する研究
曾根大樹・近藤隼人・柳井重人
- 36 インドネシアの伝統的広場“alun-alun”の変化と若者の意識について
小堀貴子
- 37 小規模公園における利用動向と意識について
重森優香・吉村美智・土本美納・大場綾香・関口あゆ美・小木曾裕
- 38 公益財団法人 東京都公園協会
緑と水の市民カレッジの取組について
高橋康夫・七理朋子
- 39 ソーシャルネットワークシステム Fix My Street、See Click Fix による自然保護、まちづくりへの展開の可能性
辻本明・岩間貴之・栗田和弥
- 40 里山における地域住民と学生による地域づくり活動について —石川県輪島市三井町を事例として—
松野愛子・棟近貴之・町田怜子・上岡洋晴・栗田和弥・麻生恵

- 41 「庭師の技」自然の素材を扱う ～技術と知恵～
持田智彦・金子隆行
- 42 旧横山大観邸庭園の現況と作庭経緯
天野公太郎・松本恵樹・國井洋一・鈴木 誠
- 43 日本のハーブ園におけるハーブ及び施設の利用促進に向けた取り組みについて
山口真貴子・葉山嘉一
- 44 街区公園における利用と実態調査 ～藤沢市唐池公園を例にして～
小島遼河・長南舞美・上野 滯・加納史裕・関口あゆ美・小木曾裕
- 45 三陸地方のヤブツバキと箴言
濱野周泰
- 46 一之江抹香亭 江戸園芸植物展示
大橋 尚美

資料

公益社団法人 日本造園学会 関東支部

- ◆ 公益社団法人日本造園学会関東支部 平成24年度幹事会(第4回～第6回) 議事録
- ◆ 公益社団法人日本造園学会関東支部 平成25年度支部総会 議案書
- ◆ 公益社団法人日本造園学会関東支部 平成25年度支部運営委員会(第1回～第3回) 議事録
- ◆ 平成25年度 公益社団法人日本造園学会関東支部大会 事例・研究報告集 執筆要領
- ◆ 平成25年度 公益社団法人日本造園学会関東支部役員名簿
- ◆ 公益社団法人日本造園学会関東支部 規程

平成 25 年度日本造園学会関東支部大会 見学会企画

公益社団法人 日本造園学会関東支部

1. タイトル 風景100年、時代を超えるランドスケープ ～未来に残すレガシー、明治神宮と東京オリンピック～

2. 趣 旨

造園学会関東支部30周年記念シンポジウムのテーマである「時代を超えるランドスケープ」と東京オリンピックを関連付け、事例発表のひとつであり造営90余年をむかえる明治神宮内苑とオリンピックスタジアムが建設される外苑の見学会を企画する。

100年かけてできた日本の風景「明治神宮内苑の森」「外苑の銀杏並木」などの見学を通じ、先人の思想と技術に触れ、建築や土木との違いが分かりにくくなっている造園の本質を認識する足がかりとしたい。またオリンピック開催をきっかけとした、100年後の風景のあるべき姿を提起する機会としたい。

3. 日 時

2013年10月26日(土) 9:30～16:30
9:30 明治神宮内苑神楽殿前集合
9:50 正式参拝
10:50 内苑の森見学
12:00 内苑見学終了
13:30 東京体育館前集合、外苑見学
15:00 日本青年館503号会議室にて現場セッション
16:30 終了

4. 講 師

明治神宮内苑：東京農業大学 濱野周泰氏
明治神宮内苑：明治神宮 沖沢幸二氏
明治神宮外苑：東京大学大学院 小野良平氏
現場セッション：千葉大学大学院 古谷勝則氏

5. 参加人数

人 数：定員35人

6. 会 費

学会員 2500円
非学会員 3000円
学 生 2000円

7. その他

服装：正式参拝にて男性は上着・ネクタイ着用、女性も準ずる服装を着用
靴は歩きやすいものを推奨

第9回学生デザインワークショップ サマースタジオ2013

公益社団法人日本造園学会関東支部主催・同東北支部協力・石川町共催
後援：NPO法人ふくしま風景塾

『原発の被害を受けた土地と向き合う・2』

成果発表会

開催場所：東京農業大学世田谷キャンパス 百周年記念講堂

時間：13：10～15：10 一般公開（無料）

司会進行：霜田亮祐（HUMUS landscape architecture Inc.・関東支部運営委員）
挨拶：田口和憲（石川町教育長）

チームA：「中心市街地活性化～景を結ぶ」

チームB：「温泉と桜～むすびのまち石川町」

チームC：「御齊所街道の海と山のつながり～おもてなし街道」

チームD：「中谷第二小学校の活用計画」

チームE：「ランドスケープと産業～TRINITY EARTH」

参加学生 約30名・5チーム

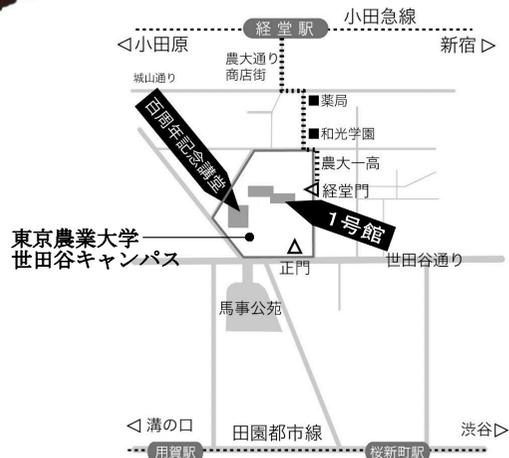
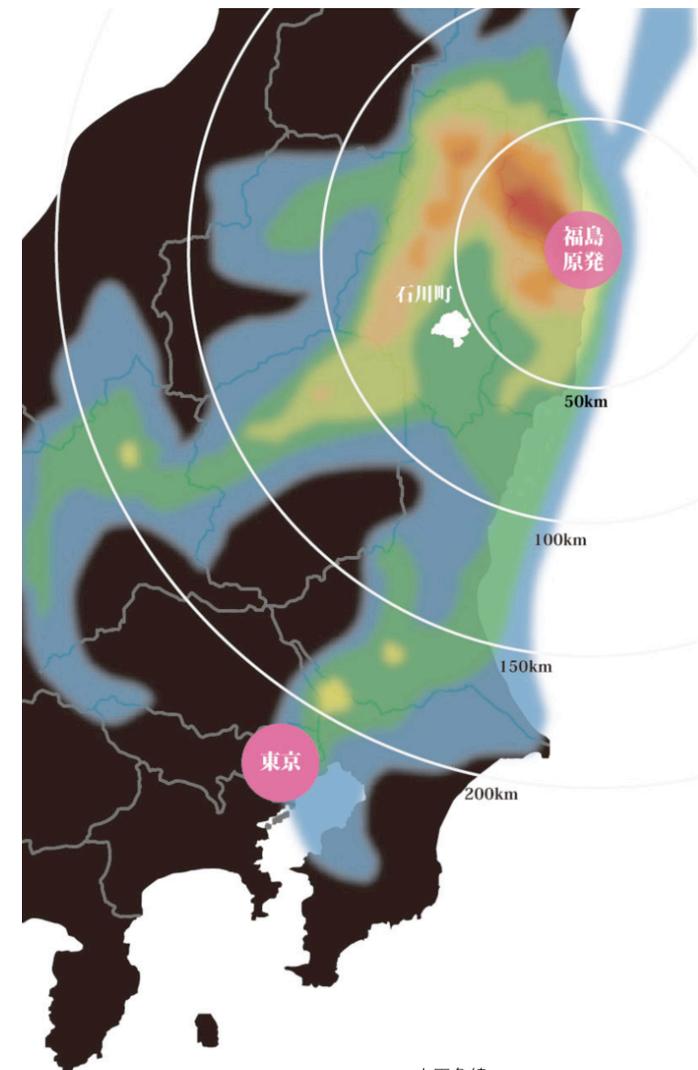
東北：福島大学、宮城大学

関東：東京農業大学、千葉大学、一橋大学、慶應義塾大学、明治大学、多摩美術大学、日本大学（生物資源科学部、理工学部）

関西：奈良女子大学

石川町地元より：石川中学校、県立石川高校

2012年以来福島県石川町で開催している学生デザインワークショップの成果報告会です。昨年のテーマは原発風評被害の克服、2013年はさらに森と海との交流（福島の横軸）を重点テーマとしています。内陸の石川町と津波の被害を受けたいわき市久ノ浜地区などの交流を視野に入れながら、地域の将来像を提案いたします。



サマースタジオ2013

公益社団法人日本造園学会関東支部主催・同東北支部協力・石川町共催
後援：NPO法人ふくしま風景塾

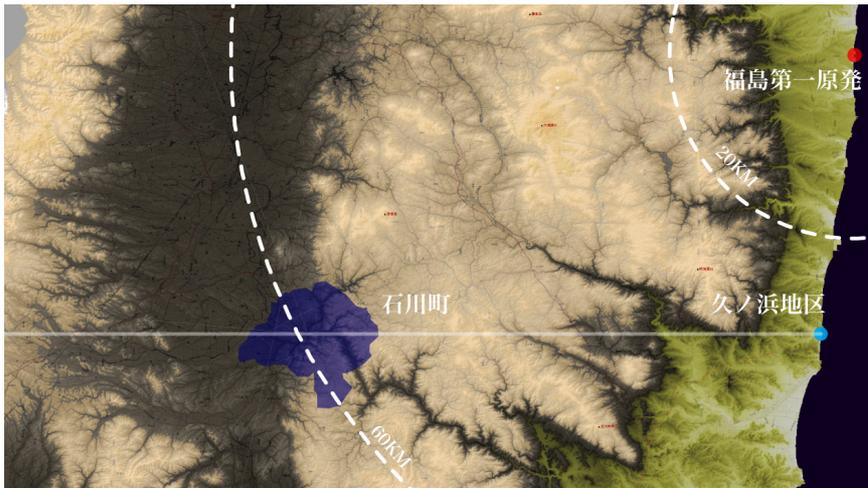
『原発の被害を受けた土地と向き合う・2』

東日本大震災における原発事故の最大の被害を受けた福島県では、いまだに今後の将来像を描けていない地域が多い。放射線量の程度にかかわらず、風評被害として全県で生活・産業に深刻な影響が続いている。福島の復興なくして東北の復興はないとも言われている。

度合いの異なる被害状況の中でも福島第一原発から60KM圏に位置する福島県石川郡石川町に注目する。石川町は原発事故の避難指示解除準備区域（20km圏）に近接しながらも放射線量の非常に低い自治体、いわゆる「クールスポット」ともいわれる地域の最前線に位置する。そのため、原発事故の被害を受けた土地の復興のための後方支援の拠点ともなる可能性は高い。一方で、原発事故から派生した風評被害の克服が地域に重くのしかかる課題ともなっている。また、原発事故がなくとも高齢化や過疎化が進行する地域でもあり、地域活性化のためのアイデアが求められている。

サマースタジオでは現地でのワークショップにおける地元関係者との対話や現地環境の視察を通じて、生活や生業などに関わる具体的な課題や活かすべき環境資産を見だし、解決のためのアイデアや土地・大地との繋がりの中で「再び人々が豊かに暮らすことのできる」福島の将来像について考えていく。

同テーマでのワークショップは2012年度から石川町で開催され、今年が2年目となる。2012年度（1年目）は、主に「風評被害克服」に重点をおいた町と周辺地域も含んだ活性化のアイデアの検討をした。2年目となる2013年度では、「原発周辺地域から避難された人々が石川町で生業を営むことのできる土地の活用・再生案の検討」を行う。石川町と周辺地域との横のつながりに重点をおくものとなる。今年が3カ年連続したプログラムの2年目にあたり、昨年度に得られた知見や提案内容をベースに、更なる展開と深化を追求していきたい。



PHASE-1 石川町WS

- 1日目：8/16（金）環境資産の発見
（現地視察・産業の視察）
- 2日目：8/17（土）人文環境のイメージング
（海と森の交流 - いわき市久ノ浜地区との交流）
- 3日目：8/18（日）課題の整理と将来像のプレスト（対話型プレゼン）

PHASE-2 提案のブラッシュアップ

- 9/21（土）中間発表@東京農業大学
- 10/27（日）造園学会関東支部大会@東京農業大学
- 12/15（日）地元報告会@石川町

3カ年プログラム

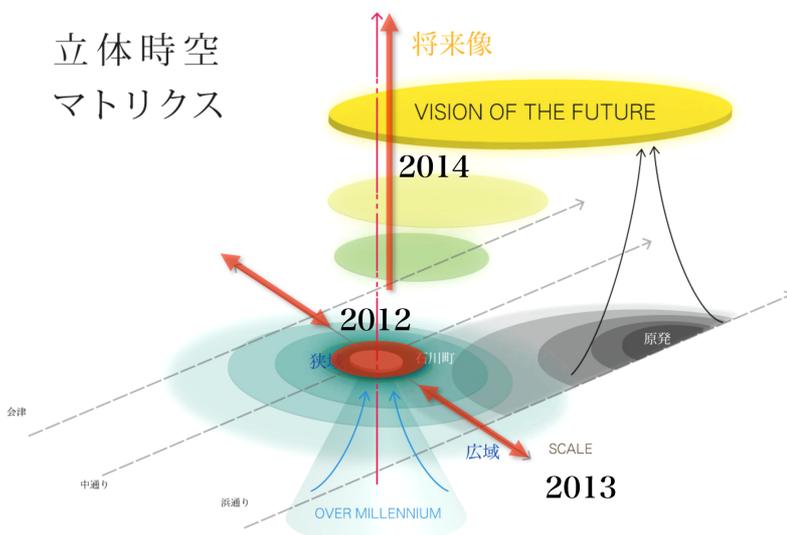
- 1年目（2012）：
町と周辺地域も含んだ活性化や風評被害克服に関するアイデア
（風評被害克服）
- 2年目（2013）：
原発周辺地域から避難された人々が石川町で生業を営むことのできる土地の活用・再生案の検討
（石川町と周辺地域との横の繋がり）
- 3年目（2014）：
千年の営みから学び、廃炉までの約40年間の石川町と周辺地域の将来像の検討。また、提案だけに留まらない、それを実行する担い手としての次世代への継承。
（時間軸）

参加学生 約30名・5チーム

- 東北：
福島大学、宮城大学
- 関東：
東京農業大学、千葉大学、一橋大学、慶應義塾大学
明治大学、多摩美術大学、日本大学（生物資源科学部・理工学部）
- 関西：
奈良女子大学

石川町地元より
石川中学校、県立石川高校

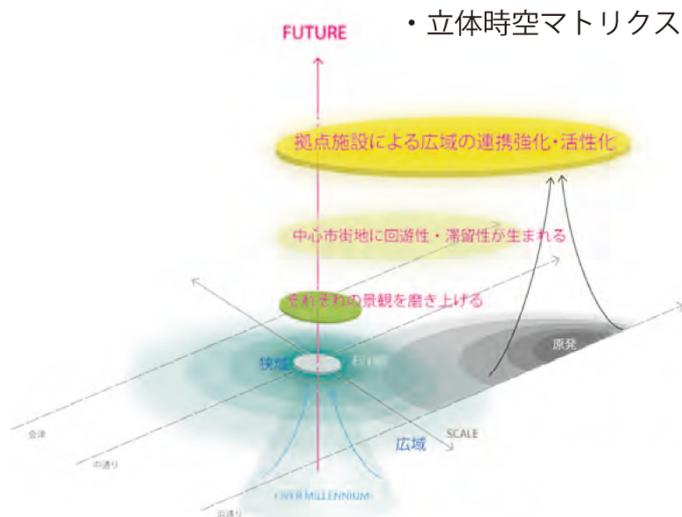
立体時空マトリクス



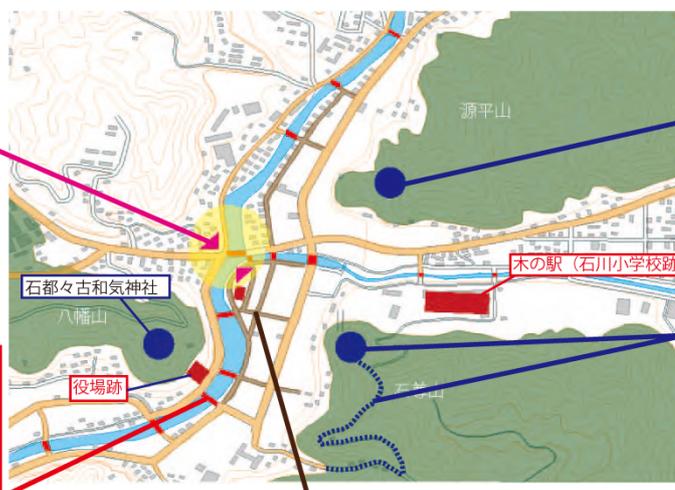
中心市街地活性化：景を結ぶ

・方針
 景観を利用して観光客を増やし
 広域の交流拠点として機能させる

・コンセプト
 石川町にある景を資産と捉え、
 それらをつ結びつける
 ↓
 魅力が高まる
 回遊性が高まる、滞在する人が増える
 ↓
 他地域の人との交流を高める
 プログラムを行なう
 ↓
 広域の交流拠点として連携強化が
 達成される。



活性化方針図



広域の交流拠点と住民の交流拠点として、川と交通の合流点を利用する。
 現在の役場の跡や石川小学校の跡も同様の拠点として新たに整備する。



現在あまり目を向けられていない橋の景観を再評価する。
 広く知られていない橋それぞれの由来や歴史をPRし、その橋に合った整備を行っていくことにより資源として磨き上げていく。
 将来桜めぐりに並ぶ、橋めぐりをできるようにする。

路地の整備計画

春の風景

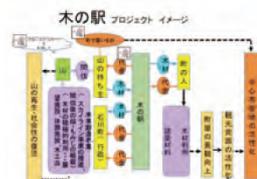
既存の路地・新しい路地の整備を行い、景観を結ぶことによって魅力的に変えていく。
 路地の雰囲気を活かす。
 街の中から路地を通して春は桜、秋は山の資産が楽しめるようにする。

秋の風景

Before

After

スギ林の間伐、管理を進めていくために「木の駅」プロジェクトの導入。



現在使用されていない源平山を視点場として整備することにより景観軸を形成する。

スカイライン計画の実現



石尊山視点場



スギ材を利用した施設などを設置し、人々がゆったりとした時間を過ごせるようにする。

「むすびのまち」石川町

■石川町の特徴

- ・石川町は古来より人々が住み着く場所であった …人と大地のつながり
- ・会津と浜通りの中間にある宿場町であった …街と街とのつながり
- ・湯治場として栄え、県外からも多くの人を迎えていた …町と人とのつながり

⇒これらのことから石川町は「むすびのまち」だと言える。

■コンセプト

2011.03.11 の東北大震災の影響で起きた福島第一原子力発電事故、風評被害により、人とのつながりが途切れてしまった。そこで私たちは、途切れた人とのつながりを取り戻し、また「むすび」をより強固なものにするために、石川町ならではの温泉・桜を活かした町全体で祝うウェディング「湯エディング」を提案する。

■提案内容

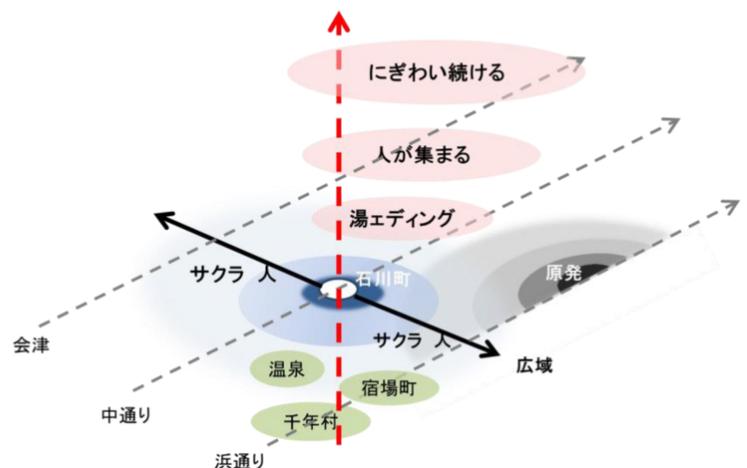
石川町の二つの観光資産である母畑温泉・猫啼温泉を視覚的・意識的につなぐ。

- ・川沿いにテラスを設置して人を川に近づける
- ・足湯サロンを設置して人とのつながりの場を設ける
- ・結婚式で川上り・川下りを行い川沿いにいる人から祝ってもらう
- ・石川町のポテンシャルを活かしたチャペルを設置
- ・しあわせの広がりが見える記念植樹
- ・思い出の地で眠る桜葬



■ビジョン

結婚式の時だけの関わりではなく冠婚葬祭、人生の節目で石川町と関わっていくことにより、にぎわいが持続し、人とのつながりが絶えず続いていく。



御齋所街道 海と山のつながり

2012年、3月12日 福島県第一原子力発電事故により福島県は放射能を浴びた危険な土地として認知された。しかし、福島県内にも石川町のような放射性濃度の低い「クールスポット」と呼ばれる場所が存在するが、風評被害という影響を受けている。

このような風評被害を打開するために、まずは福島県内のつながりを強くする必要があると考えた。クールスポットである石川町を基点に御齋所街道を通じホットスポットであるいわき市の海岸部との横のつながりを強くする。

Isikawa's potential

震災後、海岸部と内陸部の交流は多くの場所で行われていたが、今もなお続いている交流は少ないという。現在も石川町との交流が続くいわき市の久ノ浜では、石川町の良さは「人のあたたかさ」だと語っていた。私たちも訪れたとき、他の地域にはない現地の人たちが密接に関わってくれるようなあたたかさを感じた。他の地域にはないおもてなし。もはや、石川町に住む人たちこそが石川町にとってのポテンシャルなのではないだろうか。



Concept

おもてなし街道

横のつながりである御齋所街道の地形を生かし、石川町のおもてなしというポテンシャルを組み合わせることで、多くの人との交流を生み出し、強固なつながりを広げていく。



Section



Future

石川町の良さである「おもてなし」というものを最大限に引き出すために、3stepで構成する。

Step1 (景観形成)

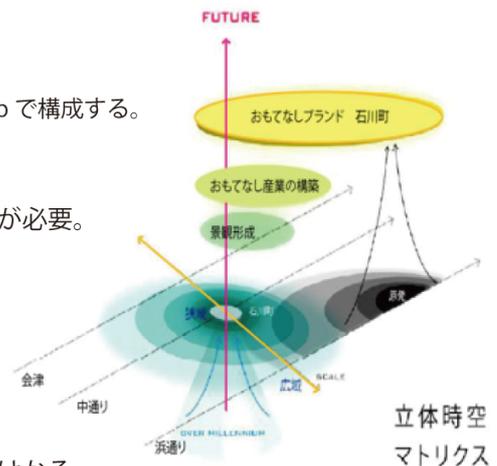
石川町のおもてなしを直に感じることを提供することが必要。

Step2 (独自産業)

自然に溢れる空間の中で、地元の人と直接ふれあい話せる形式のレストランや結婚式を設置。

Step3 (強固なつながり)

おもてなしブランドとして地域産業をフル活用しながら、活性化をはかる。



石川町長田郷・中谷第二小学校の活用計画

Back Ground

対象地である福島県石川町は原発事故による放射線濃度が他の地域と比べ、非常に低い値を示すいわゆるクールスポットであるにもかかわらず、風評被害は今でも続いている。

また、石川町は慢性的な人口減少の問題を抱えており、2年後に当地域の小学校は、現在8つある中の6つを廃校にし、一つの学校に集める統廃合計画がはじまる。

そこで私たちは、廃校になる小学校をつぶすのではなく、新たな教育の場へと転進させることで、下記の統廃合による課題と風評被害を払拭する切り口となるような提案を試みた。

Problem

統廃合によって生じる課題

- ・学校ごとの教育の個性がなくなる
- ・地域交流の場としての機能がなくなる

Concept

『学校の駅』計画～教育とコミュニケーションのネットワーク化～

各小学校がもつポテンシャルを活かし、教育の場として残す。それにより、統合された小学校は、林間学校や学童といったような立ち位置で補助的な教育の場として機能する。

学校だけでは学べない課外活動の場所として、新しく出来る小学校とつながる『学校の駅』計画はここにしかない新たな教育システムとなる。



図1 「学校の駅」のネットワークダイアグラム図

Site Proposal

- ・『学校の駅—Case 中谷第二小学校—』
「中谷学びの里」

- Site1[森]
- Site2[はなれ]
- Site3[農地]
- Site4[校舎]

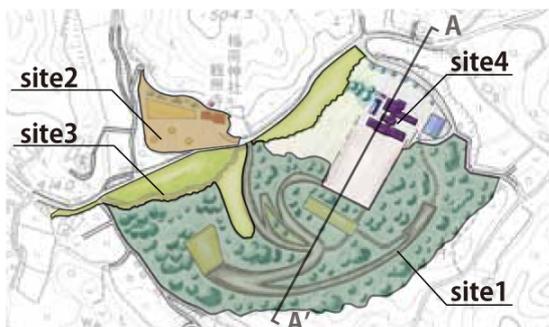


図2 中谷第二小学校ゾーニング図

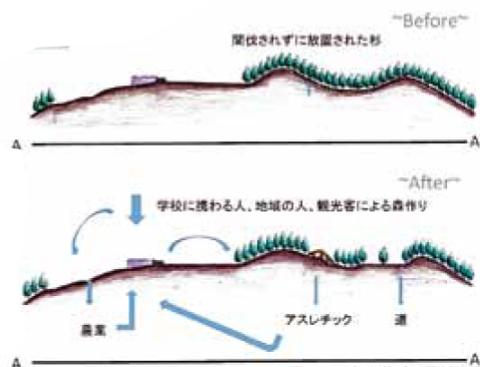


図3 中谷学びの里断面図

今回は統廃合計画の一番最初に廃校になる中谷第二小学校をケーススタディとして計画する。

中谷第二小学校、およびその周辺地域を上記4つのSiteにゾーニングし、それぞれのSiteのデザインやイベントを計画することで、山々に囲まれた中谷第二小の特徴を活かした学習の場「中谷学びの里」として提案する。

6つの小学校がそれぞれの特徴を活かし、個性のある学習の場となることで、統廃合後に個性豊かな6つの学校が一体となった、新たな小学校の教育システムをつくる。

Future Vision

この教育システムによって出来る活動を浜通りの地域とも協同しながら、石川町のみならず福島全域とネットワークする。

この他地域を巻き込む『学校の駅』計画は、他にはない教育システムとなり、県外からの移住も誘致し、風評被害を一蹴するようなプランの一つとなるだろう。



図4 中谷学びの里 マネジメント関連図

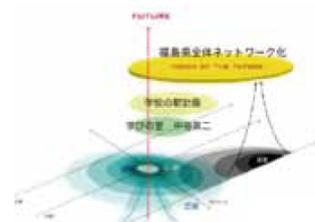


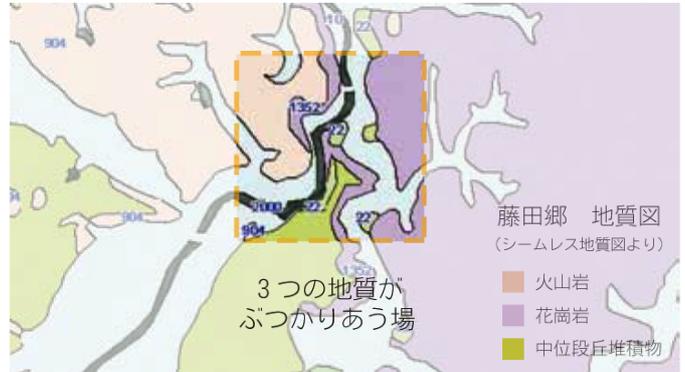
図5 立体時空マトリックス・「学校の駅」の将来の展望

コンセプト

TRINITY EARTH

— 3つの地質が三位一体となる場所で行われる産業の6次化の成果としての「キッチン」の提案 —

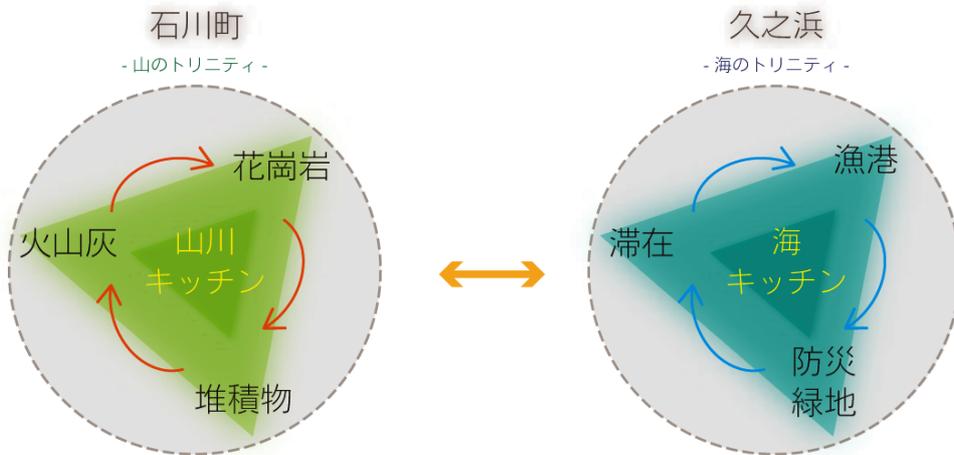
※トリニティ (trinity) は、
 トライン (trine) の名詞形で、
 3重、3つ組、3つの部分を意味する



石川町沢田地区は阿武隈川に接し、なおかつ流域の中でも唯一の3つの地質がバランスよく三位一体となったとても稀な場所である。この3つの地質と石川町の地質・地形・植生等の環境資源をフルに活用したキッチンを提案することで、新たな産業の風景を生みだし、『石川町の農の風景によるブランディング』をはかる。さらに、石川町の真東に位置し御在所街道で石川町とつながりをもった久之浜とは、相互が持つ3つの要素を産業の六次化を軸にデザインすることで、2つの場所を核とした福島県のブランディングをはかる。

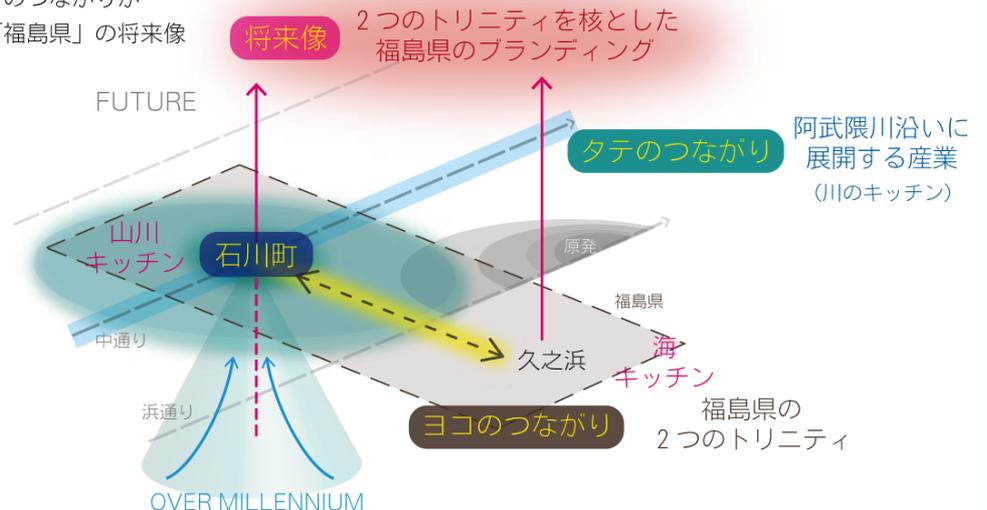
2つのトリニティ

場所によって作物や産業の構成が明確に分かれることで、風景として質の高い観光資源を提供する。キッチンは産業の六次化の成果として石川町・久之浜の核となる。



立体時空マトリクス

タテのつながりとヨコのつながりが生み出す「石川町」「福島県」の将来像



時代を超えるランドスケープ。

緑のエイジングで俯瞰する造園の30年

【キーノートスピーカー：基調講演】

■作品群で俯瞰する時代の流れ、これからのランドスケープ・造園技術者の展望

戸田 芳樹氏

株式会社戸田芳樹風景計画代表取締役



公益社団法人日本造園学会関東支部設立30周年記念大会

入場無料

会場：東京農業大学世田谷キャンパス百周年記念講堂
平成25年10月27日(日) 15時20分～17時50分



【オブリガートスピーカー：話題提供】

■アーバンデベロップメントの魔法の緑

山本和彦氏

森ビル株式会社特別顧問

(取締役副社長執行役員)、森ビル都市企画社長

■東京の水風景を呼び起こすパイオニア

多田正見氏

江戸川区長

■“人”のつくった森／90年の森に見る自然の力・人の力

濱野周泰氏

東京農業大学教授

■閉会の挨拶・コメンテーター

小木曾裕

株式会社URリンケージ 執行役員

【ナビゲーター：進行役】

町田 誠

国土交通省都市局公園緑地
景観課緑地環境室長

【司 会】**阿部伸太**：東京農業大学

時代を超えるランドスケープ

—緑のエイジングで俯瞰する造園の30年—

日 時： 2013年10月27日（日） 15:20～17:50
場 所：東京農業大学世田谷キャンパス百周年記念講堂

明治6年の太政官布達から140年。その時代時代によって、都市の緑はどのように創出され、守られてきたか。今、日本の国民一人ひとり、6畳間に匹敵する広さの都市公園を持つに至った。しかし、緑あふれる豊かで潤いある都市に暮らしているという実感を持っている人はどのくらいいるだろうか。一方で、民間の事業者が様々な形で作り出すまちの緑が、私たちの生活に格段の居心地のよさをもたらしていることを、私たちは既に体験している。また、公園の管理においても、様々な創意工夫が、多様な主体の参画によってなされ、これまでにない魅力が生まれつつあるのを目の当たりにしている。

日本造園学会関東支部設立30年にあたり、都市の緑を取り巻く状況が、大きく変化しつつあるこの30年間を、緑のデザイン、緑溢れるデベロップメント、緑の都市づくり、永遠の森づくりなどの観点から、時代を牽引されてきた代表者に語っていただき、2020年に決定した東京オリンピックも視野に入れ、これから将来に向かって発展的に広がる造園・ランドスケープのビジョンをシンポジウム参加者全員で展望・共有したい。

【キーノートスピーカー：基調講演】

■作品群で俯瞰する時代の流れ、これからのランドスケープ・造園技術者の展望

・戸田芳樹

氏：株式会社戸田芳樹風景計画代表取締役、日本造園学会関東支部副支部長、東京農業大学客員教授

◇国の内外問わず多くのプロジェクトに参加し、この30年余の間に多くの表彰を受けたさまざまな作品群を残している。生き物をベースに美しい風景と豊かな人間生活の実現を一貫して追求してきたその作品群を辿りながら、この30年を俯瞰して、ランドスケープ界の来し方を振り返るとともに、これからランドスケープに携わる技術者が社会に対して何を発信していくべきか、氏のアグレッシブな視界で展望する。

【オブリガートスピーカー：話題提供】

■アーバンデベロップメントの魔法の緑

・山本和彦

氏：森ビル株式会社特別顧問（取締役副社長執行役員）、森ビル都市企画社長

◇当時の都市再開発事業としては最大級の規模でありながら、緑を纏い、地域に開かれたアークガーデンを擁した最先端の複合施設（83年着工、86年竣工）。その後、六本木ヒルズへの進化など、森ビルの都市開発戦略、商業業務系分野における緑化技術の進化、緑の価値とは…。緑の都市開発のパイオニアでありトッランナーであり続ける理念・哲学を聴く。

■東京の水風景を呼び起こすパイオニア

・多田正見

氏：江戸川区長

◇小松川境川親水公園（江戸川区）（84年完成）、古河親水公園（74年完成）、一之江境川親水公園（95年完成）。そして83年「緑の都市賞」審査委員長賞（水と緑のネットワークづくり～江戸川区における親水公園の創造～）、97年「緑の都市賞」内閣総理大臣賞（緑の都市づくり部門）受賞など、歴史的独自性のあるウォータースケープが地域の個性を生み出したグリーンインフラストラクチャーとなった。その立役者の想い。

■“人”のつくった森／90年の森に見る自然の力・人の力

・濱野周泰

氏：東京農業大学教授、日本造園学会関東支部副支部長

◇明治神宮創建90周年。近代造園学の父でもあり造園学会を設立された上原敬二先生が手掛けられた永遠なる森。“人”がつくった森として知られる明治神宮の森には、造園植物が自然に育つ力だけでなく、その森をつくらうとする人々の想いと取り組み、そして外苑とユニットで計画された神宮経営のシステムなど、これからの地域づくりに示唆を与える“技術”が内在している。

【閉会の挨拶・コメンテーター】

小木曾

裕

氏：株式会社URリンケージ 執行役員

日本造園学会関東支部長／東京農業大学客員教授

【ナビゲーター：進行役】

町田

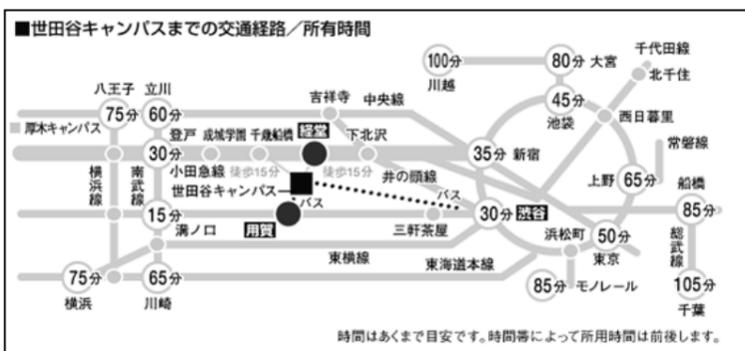
誠

氏：国土交通省都市局公園緑地・景観課緑地環境室長

日本造園学会関東支部副支部長

【司 会】阿部伸太：東京農業大学准教授

Access Information



山の手線

- ◆ 渋谷駅下車（渋谷駅西口）

バス＜渋谷駅～農大前＞（30分位）

- 小田急バス 成城学園前駅西口行……………（渋24）
調布駅南口行……………（渋26）
- 東急バス 成城学園前駅西口行……………（渋24）
祖師ヶ谷大蔵駅行……………（渋23）

小田急線

- ◆ 経堂駅下車 南へ徒歩15分
- ◆ 千歳船橋駅下車 南へ徒歩15分
- バス＜千歳船橋駅～農大前＞（5分位）
渋谷駅行（渋23）、等々力操車所行（等11）
用賀駅行（用01）

東急田園都市線

- ◆ 用賀駅下車
徒歩20分
- バス＜用賀～農大前＞（10分位）
世田谷区民会館行（園02）、祖師ヶ谷大蔵駅行（用01）

東急東横線

- ◆ 田園調布駅下車
バス＜田園調布駅～農大前＞（30分位）
世田谷区民会館行（園02）



- ◆ 問い合わせ：阿部伸太（東京農業大学）

TEL：03-5477-2664

E-mail：shita@nodai.ac.jp

公益社団法人日本造園学会関東支部 設立30周年記念支部大会 公開シンポジウム
時代を超えるランドスケープ・緑のエイジングで俯瞰する造園の30年
－東京2020オリンピックを視野に入れて－

日時：2013年10月27日（日）15:20～17:50 場所：東京農業大学

講演者紹介

■開会の挨拶・ナビゲーター

町田 誠（マチダマコト） 国土交通省都市局緑地環境室長

■基調講演・キーノートスピーカー

戸田芳樹（トダヨシキ） 株式会社戸田芳樹風景計画 代表取締役

国内外の多くのプロジェクトにおいて、美しい風景と人間の豊かな生活を実現する
シンプルでダイナミックかつ繊細な作品を世に多数送り出している



■話題提供・オブリガートスピーカー

山本和彦（ヤマモトカズヒコ） 森ビル株式会社特別顧問
森ビル都市企画株式会社 代表取締役社長

「Vertical Garden City - 立体緑園都市」森ビル株式会社が理想とする、緑に覆われ
生物多様性に富んだ自然と共生する超高層都市づくりを40年にわたって牽引



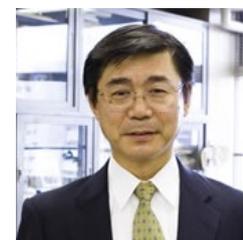
多田正見（タダマサミ） 江戸川区長

親水公園のパイオニア 区民1人あたり樹木10本など、独自の施策で「豊かな
水辺の遊水都市」づくりを強力に推進 「緑の都市賞」を過去2度にわたり受賞



濱野周泰（ハマノチカヤス） 東京農業大学教授

その生理・生態・形態的機能によって人間の生活環境や景観形成に貢献している
樹木の「気持ち」を誰よりも熟知している造園樹木研究の第一人者



■閉会の挨拶・コメンテーター

小木曾裕（コギソユタカ） 株式会社URリンケージ 執行役員
東京農業大学客員教授

■司 会

阿部伸太（アベシント） 東京農業大学准教授

公益社団法人日本造園学会関東支部 設立30周年記念大会 公開シンポジウム
時代を超えるランドスケープ・緑のエイジングで俯瞰する造園の30年
-東京2020オリンピックを視野に入れて-

明治6年の太政官布達から140年。これまで、都市の緑はどのように創出され、守られてきたのか。

今、日本の国民一人ひとり、6畳間に匹敵する広さの都市公園を持つに至った。しかし、豊かな生活実感と正の相関関係を持つであろう都市の緑は、公園だけで構成されているのではない。長い時間の中で成長した街路樹、美しく整備された河川空間も然り。そして昨今、民間企業が様々な形で作り出している多くの都市の緑が、日常生活に格別の居心地の良さをもたらしていることを、私たちは日々の暮らしの中で実感している。また、公園においても、多くの創意工夫・活動が多様な主体の参画によってなされ、これまでになかった新たな魅力が生まれつつあるのを目の当たりにしている。

都市の緑を取り巻く状況が、大きく変化してきたこの30年間で、緑のデザイン、緑溢れるデベロップメント、緑の都市づくり、人による永遠の森づくりなどの視点から、各分野のオーソリティに語っていただき、将来に向かって発展的に広がる造園・ランドスケープのビジョンをシンポジウム参加者全員で展望・共有したい。

2020年に決定した東京オリンピックを視野に入れつつ。

開会の挨拶・ナビゲーター 国土交通省都市局緑地環境室長 町田 誠 (5分)

基調講演・キーノートスピーカー

◇株式会社戸田芳樹風景計画 代表取締役 戸田芳樹 (30分)

作品群で俯瞰する時代の流れ、これからのランドスケープ、造園技術者の展望

話題提供・オブリガートスピーカー

◇森ビル株式会社特別顧問 森ビル都市企画株式会社 代表取締役社長 山本和彦 (25分)

アーバンデベロップメントの魔法の緑

◇江戸川区長 多田正見 (25分)

東京の水風景を呼び起こすパイオニア

◇東京農業大学教授 濱野周泰 (25分)

“人”のつくった森/90年の森に見る自然の力・人の力

パネルディスカッション (35分)

閉会の挨拶・コメンテーター 株式会社URリンケージ 執行役員 小木曾裕 (5分)

司 会 阿部伸太 東京農業大学准教授

日本造園学会関東支部の30年ランドスケープの未来

株式会社戸田風景計画 戸田芳樹

1. はじめに

山崎正和の著書「柔らかな個人主義の誕生」(1984年)は時代をどのような視点でいつ見るか、教示される貴重な読み物である。中でも哲学者カール・レーヴィット教授の「現代人は自然のリズムに寄り添って生きる事が出来ない以上、自分の人生を歴史の中に位置付ける他はない」という引用は私達ランドスケープアーキテクトにとって大変示唆に富んだ指摘と言えよう。ランドスケープデザインとは自然に寄り添い、空間はもとより時間も包み込んだ四次元の芸術的表現であるからだ。しかし、現代のリズムはもはや悠久の時間を分断し分節した断片で考察するしかなく、私達は時間を区切る事で過去を省み、未来を進むしかないであろう。これから、日本造園学会関東支部の30年を見て行きたい。

2. 日本造園学会関東支部の30年

今年が造園学会が生まれて90年、その還暦の年に関東支部が生まれ30周年を迎えた。1983年に東京農業大学を会場とし金井格東京農業大学教授が支部長に就任してスタートした。この後、関東支部の働きかけにより北海道、中部、東北支部が次々に発足した。国際的な活動では1985年イフラ世界大会を日本で開催した事が特筆されるであろう。また、1984年のリバプール国際庭園博覧会や1988年のプリズペンの国際レジャー博覧会の参加の推進等、日本のランドスケープアーキテクトの海外への飛躍のきっかけとなった。現在、関東地域の造園遺産のデータ収集、整理やデザインワークショップの歩みをまとめ、30年の区切りを整理している。

3. 公共造園における30年

昨年東京で全国都市緑化フェアが開かれ、多くの人々が参加し楽しまれた。第1回のフェアは関東支部が発足して直後の1983年に大阪で開かれ、今日まで途絶えることなく続いている。緑豊かな都市づくりの意識高揚と知識・技術の習得を目的としており、公園緑化行政に大きな役割をしている。

また、1990年の大阪花博、2000年の淡路花博、2004年の浜名湖花博、2005年愛・地球博と大規模な博覧会を続けて開催できる程ランドスケープ界は力をつけてきた。

さらに特筆すべきは国営公園の全国展開である。1974年の武蔵丘陵森林公園をスタートとし、現在全国に17箇所設置し、国民の多様なレクリエーション活動に供している。中でも1983年に開園した昭和記念公園(180ha)はその規模に合わせて「みんなの原っぱ」「日本庭園」



オランダ日本庭園



大阪花博



第29回全国都市緑化フェア TOKYO 上野会場



愛・地球博日本広場

「子供の森」「レインボープール」など、公園で考えられる数多くの施設を設け、利用者の多様なニーズを受け止めたレクリエーション空間として創り出された。ある意味、日本の公園行政が最も華やかに成功した事例であり、様々なイベント等は他の公園の模範となるものであろう。

公園行政全体を見れば 2000 年まで一定の右肩上がりで公園面積は拡大してきたが、これからは量から質への転換、ハードな施設からソフトな運用等、公園が社会とどう向き合い、その価値をいかにアピールするかが問われる時代を迎えている。

4. 民間におけるランドスケープ

ここでは都市におけるランドスケープに絞ってみたい。1970 年から 80 年にかけて、建築とランドスケープの関係は、庭園のような外構か、何も作っていない広場であった。作り手は高質なランドスケープ空間の提供をしなかったし、利用者もそこまでの要求はなく、ただ漠然とスペースがあったに過ぎなかった。しかし 80 年代の後半から建築家とランドスケープアーキテクトとのコラボレーションが徐々にはじまり、それを踏まえた空間性の高い作品や、単独の彫刻ではなくファール立川のように面的にアートを展開する空間等の試みがなされた。そして 2003 年、六本木ヒルズの誕生となる。このプロジェクトの魅力は様々なランドスケープ空間が重層的に展開している事であろう。まさに消費者の欲望を受け止める空間として、ランドスケープアーキテクト佐々木葉二氏が、精根をかたむけて実現したものである。10 年経った今、このプロジェクトが 21 世紀初頭の都市ランドスケープのひとつの頂点を極めた作品だったと確信している。その後のプロジェクトでは施設の集積より、大きな抜けた空間を設けたミッドタウンや、建物の間に庭園を内包した三菱一号館のように、拡大か縮小した空間として収斂してしまったきらいがある。

そして現在、開発しているランドスケープ空間は単なる建築のまわりの外構で終わらず、線的、面的に都市の中に進入し、みどりのネットワークの一端を担い、多様な自然を民間のスペースで被うまでになっている。地区において、生物多様性の実現を試みている民間の開発者は、単なるビジネスの枠を越え、都市づくりに参加する事がまわりまわって企業に良好な評価をユーザーが与えるであろう事を知っている。

この 30 年間で、日本は経済発展のピークに達し、そして崩壊し、長く低迷したが次の時代は 20 世紀型のモデルとは違う新しい理念の世界が始まると信じている。ランドスケープの哲学と技術を使い、自然と人が共生し、地域環境を保持した幸せな生活を作り上げて行きたい。



国営昭和記念公園みんなの原っぱ



新宿住友三角ビル



ファールレ立川



六本木ヒルズ



港区の民間緑化

緑を創出し、育む都市開発

森ビル株式会社特別顧問

森ビル都市企画株式会社 代表取締役社長

山本 和彦

1. アークヒルズ 森ビル再開発のはじまり

1968年に霞が関ビルが竣工し、超高層ビルの時代が幕開けした折、森ビルでも超高層を建てるための敷地を探していた。それまで、森ビルは関東大震災復興の際に区画整理が行われた新橋・虎ノ門エリアを中心に開発を行っていたが、区画は千坪程度の規模でしかなかった。そのため、区画整理されていない赤坂地区の土地を求めているところ、1969年都市再開発法が施行され、組合を作れば民間企業でも再開発ができるようになった。そして行政から、赤坂地区に隣接する谷町エリアの木造密集市街地が再開発の候補地に挙がり、これをきっかけとしてアークヒルズの再開発を進めることになった。

再開発の目的は、災害に強いまちにすることだった。当時東京はまだ木造のまちであり、大震災の影響もあって耐火のまちづくりを進めることが目的だった。これに対する賛同はあったが、一方で再開発によってできるまちはコンクリートジャングルになるという批判も受けた。敷地は傾斜地だったので、斜面緑地や大邸宅の緑がかなり残っており、こうした緑が失われたり、生物がいなくなるという批判が強かったのだ。したがってディベロッパーとしては地震や火事に強いまちをつくと共に、緑も減らさず、むしろ増やすということを意識して計画を立てた。そして、サントリーホールの屋上を緑化する、外周路を桜並木や楠の並木道とするといった工夫をした結果、竣工当初でもある程度まとまった緑を創出することができた。

そして30年近く経った現在、アークヒルズの緑はここまで成長した。これにより、再開発によって緑を増やすことができるということを証明できた。桜並木は現在、東京の桜名所の一つになっている。

2. 愛宕グリーンヒルズ、そして六本木ヒルズへ

アークヒルズ以降、森ビルにとって、再開発により緑を増やすということが一つの重要なテーマとなった。愛宕グリーンヒルズでは青松寺と協議し、お寺と一体的に開発をすることができた。開発以前、お寺の門前は細分化されエンピツビルが並んでおり、通りから寺の姿をみることはできなかった。再開発により寺の伽藍を再現し、参道も復活させることができ、また都市計画公園に指定された愛宕山の既存樹木を保全し、周辺のオープンスペースとともに空地の50%を緑化することに成功した。



愛宕グリーンヒルズ

六本木ヒルズでは、「文化都心」というコンセプトを掲げており、一般の方々にも親しみやすいまちづくりをする必要があった。そのため、緑の計画では毛利庭園の修景を再現し、ケヤキ並木の整備や屋上緑化も行った。ハイライトはシネプレックス屋上の田んぼである。ここでは毎年田植えと稲刈りが行われ、正月にはもちをつき、地域の季節行事の場として活用されている。



六本木ヒルズ シネプレックス屋上

アークヒルズの緑被率（1990年→2012年）

3. 都市開発と生物多様性

六本木ヒルズでは親しみやすい緑ということで、緑の内容も華やかなものが多かった。一方、時代は変わり、地球環境を考える上で二酸化炭素排出削減と並んで生物多様性の重要性が注目されるようになった。そこで仙石山森タワーでは、生物多様性に貢献した緑の取り組みを行った。その結果、JHEP (※) において日本初となる最高ランク AAA を取得することができた。



仙石山森タワー 外構

4. 虎ノ門ヒルズ 再び新橋・虎ノ門エリアへ

都市計画道路である環状2号線のうち新橋から虎ノ門に至る1.35kmの区間は、戦後長い間未開通区間のままであった。1989年立体道路制度が創設され、道路の上に建物を建築することが可能になり、環状2号線を含めた当該エリアの開発が動き始めた。事業主である東京都は、まちづくりと道路づくりを一体的に進めるという考え方でスタートし、通過交通は地下、地上は区内道路とするという発想だったが、排気塔が問題となった。迷惑施設ともいえるため、一時は昭和通りのような掘割案も出ていた。そこで森ビルは虎ノ門ヒルズ開発事業に排気塔を含めて計画することを提案し、東京都はこれを採用した。結果、本線を地下にいれることができたので、地上部には両側それぞれ13mの歩道を確保することができた。またビルの屋上を緑化することで、広い歩道の緑化と屋上緑化を連続させることもできる。環状2号線から虎ノ門ヒルズが東京中心部の新たな緑のベルトになることを期待する。

冒頭で述べたように、新橋・虎ノ門エリアは関東大震災復興で区画整理がなされたため、これまでまとまった街区を必要とする超高層は難しいとされてきた。しかし環状2号線開通をきっかけとし大街区が可能となり、虎ノ門ヒルズという超高層開発が実現した。今後さらに、敷地統合や街区整備、街区再編などによる大街区化が進ん

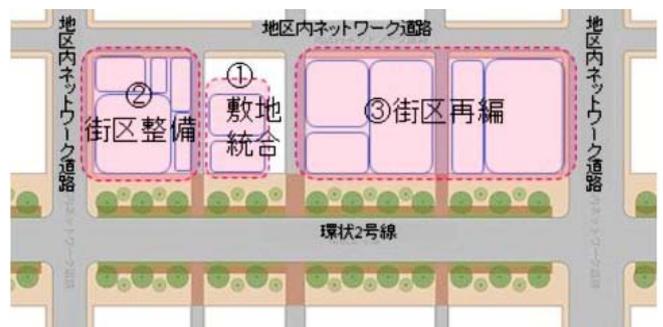
でいくと考えられる。その際、区画内道路を活用することで減歩することなく、むしろ増歩することも可能となるだろう。森ビルは再び新橋・虎ノ門エリアへ戻り、ここから新しい東京をつくっていく。



環状2号線 従前



環状2号線と虎ノ門ヒルズ



大街区化の考え方

※JHEP

ハビタット評価認証制度 (公益財団法人 日本生態系協会)

水と緑の調和都市

～江戸川区の水と緑のまちづくり～

江戸川区長 多田 正見

1. 江戸川区の概要

江戸川区は、東京都23区の東端に位置し、面積49.09km²、人口約68万人の都市である。西に荒川・旧中川、東に江戸川・旧江戸川、南は東京湾に面し、三方を川と海に囲まれている。また、公園面積約357万m²、街路樹の本数約5万8千本は23区一を誇る。

こうした水と緑の豊かな環境の中で、人々が生き生きと暮らし、地域のために貢献しようというボランティア意識が生まれ、人と人とのコミュニティの輪が広がっている。古くからの伝統を受け継ぎ、新しい時代を区民と共に創り上げる江戸川区は、日本一のまちづくりに向けて歩みを進めている。



江戸川区全景
(東京湾上空から)

2. 土地区画整理事業を中心とした都市基盤整備

江戸川区は、昭和7年に7町村が合併し、人口10万人で誕生した。当時は区内の大部分が田畑、葦などが広がる田園地帯であった。

また、関東平野の低平地に位置し、河川と海に囲まれた地勢特性から、昭和22年のカスリーン台風や24年のキティ台風を始め、数々の水害に見舞われた。



カスリーン台風
(天皇陛下ご視察)

昭和30年代には、急増する人口に都市基盤整備が追いつかず、更に公害にも悩まされることとなった。

昭和41年、急速に進む市街化の中で、都市のあるべき方向とその道筋を示した「総合開発基本計画」を策定し、土地区画整理事業を中心に、区民と区が力を合わせて、安全で快適な暮らしやすい理想のまちづくりを推進してきた。

これまでに区の陸地面積(約4,000ha)の3分の1にあたる区域が、土地区画整理によるまちづくりが推進され、道路や公園などが整備されていった。

併せて、下水道、都市計画道路、公園などの整備にも全力を注ぎ、その結果、「雨が降れば水浸し」と言われた

かつての姿からは想像のできない快適な環境に生まれかわっている。

特に臨海部では、地盤沈下で水没した民有地の復活と都市施設の整備を目的に、昭和47年から380haの埋立事業が行われた。区の面積の8%にあたるこの土地も、土地区画整理事業により開発が進められた。臨海部の埋立事業により生まれた葛西臨海公園は、都会の中のオアシスとして親しまれている。



葛西臨海公園

また、かつての小松川地域は大規模工場が多く、狹隘道路に木造住宅が密集していた。大規模工場の郊外への移転を機に、昭和50年代から65.6haに及ぶ再開発事業が行われ、防災拠点としてまちが大きく生まれかわった。

さらに、災害に強いまちにするため、スーパー堤防事業が進められるとともに、1,000本の桜を植樹。小松川千本桜は区内有数の桜の名所となっている。



小松川千本桜

3. 「ゆたかな心 地にみどり」～緑化運動の始まり

昭和45年から「ゆたかな心 地にみどり」を合言葉に緑化運動を開始。区民と行政が手を携えながら取り組む「環境をよくする運動」を40年に渡り進めてきた。その結果、今では快適で安心して暮らすことのできるまちへと発展を遂げている。

また、樹木数と公園面積の目標を、「区民一人あたり10本10m²」とかかげて、まちに安らぎと潤いをもたらすみどりの確保を積極的に進めてきた。現在区内の樹木数は621万本

(区民一人当たり9.2本)、公園数は466園を誇り、みどり豊かで良好な環境が形成されている。



左近通り

4. 「水と緑のネットワーク」～親水公園・親水緑道

昔から水と深い関わりのあった江戸川区は、下水道の普及によって役割を終えた水路を埋めるのではなく、失われた自然を取り戻し、水に親しめる身近な憩いの場を整備してきた。

昭和48年には、全国で初めての親水公園である「古川親水公園」が開園。その後も整備を進め、現在、5路線の親水公園と18路線の親水緑道、総延長約27kmに及ぶ「水と緑のネットワーク」が形成されている。



古川親水公園（整備前）



古川親水公園（整備後）

また、平成18年には、一之江境川親水公園沿線を住宅市街地としては全国初となる景観地区に指定し、平成23年には、古川親水公園沿線も景観地区に指定した。親水公園とともに、建物の高さや意匠など景観に配慮した街並みの保全、創出を推進している。



一之江境川親水公園

5. 区民が支えるみどりのまち

こうした長年の取り組みにより、区民の暮らしに密着した多くの環境資源が整うとともに、それぞれの親水公園で「愛する会」が発足するなど、地域のコミュニティ活動も大きな広がりを見せている。

平成9年には、区民が地域に愛着を持ちながら活動するという姿が高く評価され、「第17回緑の都市賞（内閣総理大臣賞）」を受賞した。

また、平成19年、第17回全国花のまちづくりコンクールで「花のまちづくり大賞」を受賞。翌20年には、花のまちづくり国際コンクール（友好部門）で最高賞の「五つ花」を受賞するなど、数々の評価をいただいている。



「愛する会」による清掃

区内全域で展開されている公園ボランティアなどのアダプト制度に代表される、区民と区とのパートナーシップ活動など、みどりを守り育て創る、様々な活動が活発に行われている。



アダプト活動

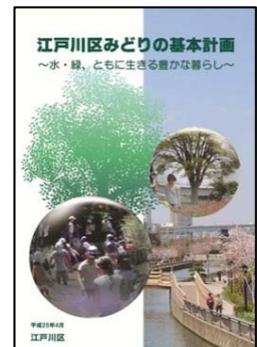
6. 「水・緑、ともに生きる豊かな暮らし」の実現に向けて

江戸川区では、平成14年5月に「水と緑の行動指針」（緑の基本計画）を策定し、みどりのまちづくりを進めてきた。この計画では、荒川や江戸川などの大河川に囲まれた本区の地形的な特徴や、これまで築き上げてきた公園や緑などのまちの資源を活かしながら、更に豊かな環境を構築していくための具体的な行動計画を示し、区民の方々と取り組んできた。現在では、多くの公園や街路樹などが整備され、みどりを愛する区民活動が活発に行われている。

区民と区の新たな行動をもとに環境充実を目指した「水と緑の行動指針」を策定してから10年が経った。この間、区民と協働で、公園、街路樹、親水公園・親水緑道、千本桜などの整備事業が進み、公共空間のみどりは着実に増加した。豊かなみどりにつつまれたまちでは、区民が様々な活動を展開し、地域コミュニティの醸成につながっている。

一方、開発に伴う大木や樹林地の消失、農地の減少が続くなど、民有地のみどりの保全が課題となっている。また、東日本大震災の被害や首都直下地震の被害想定を踏まえ、防災性を高める公園整備などをより一層進めていく必要がある。さらに、少子高齢社会・人口減少社会を迎え、幼児から熟年者までのあらゆる世代のニーズに即したみどりのまちづくりが求められている。

このようなみどりを取り巻く課題、社会情勢の変化に柔軟かつ的確に対応し、大きく育ったみどりの質を更に高めていくため、平成25年4月に新たな「みどりの基本計画」を策定。今後10年間の基本方針を「みどりを守る、みどりを育む、みどりを創る」と位置づけ、70の施策をとりまとめた。



江戸川区みどりの基本計画

区民とのパートナーシップのもと、「水・緑、ともに生きる豊かな暮らし」の実現に向け、水と緑のまちづくりを進めていく。

“人”のつくった森

—90年の森に見る自然の力・人の力—

濱野周泰

1. 巨大都市の中の森

明治神宮の森は、「代々木の杜」として広く知られている。樹木が鬱蒼と茂っている様子は、まるで自然の森のように見える。しかし、この森は人がつくった森である。巨大都市東京の中に約70haの自然に近い森林が存在することは、世界的にも類を見ないものである。明治神宮は、大正4（1915）年、明治神宮造営局官制が公布されたことにより造営が本格的に始まった。その背景には明治天皇に対する国民の思慕という大きな底流が存在していた。

神宮の森の造営は、明治天皇の崩御にさかのぼる。明治天皇の墓所は、すでに宮内省によって京都・伏見の地に決定していた。そこで「神霊をお祀りしてご聖徳をしのぶ神宮の造営を」ということで、大正二年七月の御一年祭終了後、政府は神宮創建の準備に着手し、明治神宮が代々木の地に創建されることになった。

神社奉祀調査会において「神苑たるに相応しい幽邃森厳な風致を造る」という神宮の森の方針は決定していた。しかし神社は日本独特のものであり、その形成には建物に規範的なものがみられるものの、神社林の計画・設計に関する教科書的なものは皆無の状態であった。神霊をお祀りする場所の森として、人が関与しなくても永遠に存続する「永遠の杜」の構築がもたらされた。このような状況の中で幾つかの提案がなされ、その中でも特に、大隈重信公のスギ林説は取り下げに難航した。大きなスギによる荘厳な雰囲気のある森づくりを提言したものである。神宮の森に相応しい雰囲気のある森ではあるが、樹種的に見て立地と現代の都市環境から考えると空恐ろしい計画である。当時の技術者の英知と判断力、そして先見性に改めて敬嘆する。

2. 理想の森を目指して

森の姿は明治天皇、昭憲皇太后を祀る神社林としての森林である。そこには神社林として「荘厳」、「畏敬」、「敬虔」という言葉があてはまる精神性を備えた森林が醸し出す世界をつくるのが「永遠の杜」のコンセプトになっていたであろう。天然更新によって維持される森林としての極相林の形に導いていくことを最終的な目的として、自己循環型の森林を目指したのである。当時、明治神宮の森の造営に技術者として携わった上原¹⁾は、その著書の中で明治神宮の森の造営にあたり模範としたのは16代仁徳天皇の御陵林であったと記している。仁徳陵は造営以来、禁足令によって人の立ち入りを制限し、極相林として安定した樹林が形成されている。永遠の杜として明治神宮の森づくりに応用したのである。また上原

は、全国の官・國幣社88カ所を調査し、設計の知識・技術を集積した。その成果は学位論文となり、「神社林の設計」にまとめられている。

森づくりに必要な樹木は献木によって賄われ、献木の総数は279種、10万本であった。その範囲は台湾、朝鮮、樺太など亜熱帯から亜寒帯までに及んでいる。実際に献木の種類も非常に多く、日本で人と関わりをもっている樹木のほとんどを網羅している。その中でも本数が多かったのは、マツ、ヒノキ、サワラ、カシ、クス、イヌツゲ、サカキなどである。しかし、全国からの献木には次のような制限が設けられていた。献木の条件を要約すると、①主要樹種であるマツ、カシ、シイ、クス、ヒノキ、サワラ、ケヤキなど、次に下木とするサカキ、イヌツゲ、アオキ、ヒサカキなどの常緑灌木類を重点とする。②樹姿がなるべく自然で庭園樹のように仕立物でないもの。また園芸上での変種、品種でないもの。③華麗な花実を付ける観賞用の樹木類、果樹に類するもの等は除外する。④外国産樹木類は除外するなどである。③は、神社林に不適当なだけでなく、管理上も多くの労力を必要とすることから好ましくないとしている。また④は、最終的な林苑の姿を、東京地方固有の原始林に想定しており、これの再生には生育地の郷土を異にする樹木を林苑に加えることは基本的に好ましくないとしている。これらの事柄は、神社林としての風致の構成、造成後の管理におよぶ重要な視点であり、造り出す森のコンセプトを明快に示している。

3. 森づくりの科学性と美観

造営前の境内地は、現在の南参道口広場周辺は、かつて代々木の練兵場の一部で樹木のない草地であり、御社殿付近から東側にかけてはアカマツ、モミ、カシ、雑木等の樹林、さらに御苑一帯はナラ、サクラ、エゴノキ、モミなどの雑木林が主体で、この他は点在する樹木のみで、大部分は草地や農地が占め、樹林地は全体の1/5程度であった。

このような土地に幽邃森厳な風致をもつ神社林を造るには、数多くの樹木を必要とすると同時に、この森を永遠に繁茂させるには的確な樹種を選定する必要があった。人工による森づくりではあるが、その造成に当り、直接、極相林を構成する常緑広葉樹を植栽するのではなく、先ずマツのような、いわゆる遷移課程の初期に出現する先駆樹種を、各種の針葉樹や落葉広葉樹、常緑広葉樹と混植して自然の変化、すなわち遷移の進行に委ね、最終的に東京付近の自然植生である常緑広葉樹林に近い樹林の姿に誘導していく点に「神宮の森づくり」の大きな特徴が見られる。

神宮の森の景観は、大きく構成木と風致木によって形成されている。神社林の幽邃森厳な雰囲気を創り出している樹木、すなわち原始林状態の状況はシイ、カシ、ク

ス類を主木として多様な大きさと種類の常緑広葉樹によって創り出されている。これらの樹木は森の主要な構成木となるが、これらの樹木だけによる森の姿は単調で暗い空間となることから、このような単調な景観に形と色との変化を与える樹木として形ではクロマツ、ヒノキ、サワラ、コウヤマキなど、色としてはイチョウ、エノキ、カエデ、ケヤキ、シデ、ムクノキなどを風致木として植えられた。このことによって景観からだけではなく森の生態という側面からも多様性をもたらしている。現在、神宮の森で生育している樹木は、247種17万本といわれている。

4. 土地の上に生育する樹木

「森づくり」には、1本1本の樹木について生育の特徴を把握することと、植栽する場所の環境を把握することが重要である。つまり植栽当初から、樹木の根・幹・枝・葉の各器官が十分に機能を発揮するように環境を整備する必要がある。森づくりを成功させるには、その土地の環境に適した樹木を選定することが必須である。樹木を選ぶ基本を表す言葉に「適地適木」がある。森づくりに当り、この基本を守ることが勿論、個々の樹木が生活を持続し世代を越えて、さらには種類を越えて継続的に樹木の集団を成立させる環境でなければ「森」は造れない。根が生活する地下と幹・枝・葉が生活する地上との両方の環境は、樹木の成長と共に変化する。これに対応して短時間に森づくりをするには、生育基盤となる土壌が一定の能力を備えていなければならない。

近年のように土地に対して大規模な改変が行われる造成地では、樹木の生育基盤となる土壌がどのような状態になっているのかを把握することが重要である。森づくりの要点は、その土地に適応する様々な樹木を植えることで、多様化した樹木の生育環境を形成することである。この環境が次の世代の樹木を健全に生育させることになる。このような観点から最近では、造成前に保全していた表土を造成後に撒き出し、植栽基盤を整備するようになってきた。しかし、表土は多くの生物によって形成されている環境であり、造成前に地表を被っていた植生と密接な関係をもっていたものである。特に樹林に被われていた表土は、昆虫類などの土壌動物をはじめ様々な生物の生活の場である。特に成帯性のある土壌となるには長い時間が必要である。保全しておいた表土を新たな造成面へ撒き出し、樹木を植えても直ぐに従前の成帯性のある土壌の樹林で繰り広げられていた生物の生活は再現できない。

明治神宮の森が約一世紀という短い時間で自然性の高い森を形成することが出来た背景には、適切な植樹計画と既存地形の改変が極めて僅かであったことが考えられる。

5. 永遠の森を護る

神宮の森には、御苑に天然林が約8haあり武蔵野の雑木林の面影を現在に伝えているが、人の手があまり加わっていない、土地的極相に近い樹林である。その他は人工の森である。永遠の森へ導くために①樹林内への立入禁止、②落葉落枝の清掃禁止を管理方針としている。この森では、人が森へ踏み込むことはなく、落ち葉の一枚、枯れ枝の一枚もドングリの一粒も森の外へ持ち出すことはなく、そのまま森に残されて次の生命へ繋がっている。

森を管理している底流には、生物と環境の関係における作用、反作用、相互作用、あるいは生態系が見えていると考えられる。森を構成する樹木は、生産者として十分に存在している。これらに依存して動物は、消費者として生活している。さらに森を維持する上で重要なのが、枯死体や排泄物を分解、還元する生物の存在である。このような森の中で生活する様々な生物が、繰り広げている物質とエネルギーの循環によって永遠の森は自活している。まさに「生命は土より出でて土に帰す」である。カビやバクテリアなどは、人の日常生活では邪魔者のように扱われている。しかし、これらの微生物は、生態系の中でもっとも重要な機能である「物質循環」に寄与している。明治神宮の森が、高い活力を維持してきているのは、永年にわたって熟成されてきた生物多様性にあるともいえる。

6. 緑の環境づくりへの示唆

明治神宮の森が、このように人の生活や生存に大きな力となり得るのは、森としての活性が高く、人と動物と植物との間に極めて緊密な関係が構築されているからである。現在の明治神宮の森に至るには、林苑の造営計画が審議されている時から先人の英知と技術が貫かれたことによる。樹木を対象とする科学者として、自然の摂理に真理があるとの信念があったと考えられる。色々な大きな障害を乗り越えて、将来の環境を予測し、これに耐える樹種による森を具体化したことは、科学者の神髄を見る思いである。

造営後の森は、周到に立案された管理計画を忠実に実行し、その方策を確固として守り継いできた結果として存在している。そこには樹木を中心とした多様な生物が生活する環境が形成されている。

このように人によって造られた明治神宮の森は、自然界の天然の森にも劣らない、むしろ同等以上の優れた資質をもった森となっている。この森が90年余りで形成されたことは、今後の森づくり、緑の造成、都市における緑による生活環境の改善に向けて多くの示唆を与えてくれる。

参考文献：

- 1) 上原敬二 (1983)、この目で見た造園発達史、pp246、同刊行会

100年前

50年前

2013年

太政官布達

東京市区改正条例

日比谷公園開園

旧都市計画法

関東大震災

第二次世界大戦終戦

都市公園法

東京オリンピック
全国総合開発計画

都市計画法
新全総

沖繩海洋博覧会

三全総

つくば科学技術博覧会

大阪花博

阪神・淡路大震災

五全総

愛・地球博
社会資本整備重点計画

東日本大震災

都市公園119,016ha【1873年～140年間】

近郊緑地保全区域97,329ha 特別保全地区3,717ha【1966年～47年間】

歴史的風土保存区域22,500ha 歴史的風土特別保存地区8,830ha【1966年～47年間】

保存樹27都市3,814本 保存樹林198件67ha 生垣29件1,424m【1962年～51年間】

歴史まちづくり38市町【2008年～5年間】

生産緑地地区13,991ha【1973年～40年間】

特別緑地保全地区442地区2,411ha【1973年～40年間】

緑地協定1,895地区5,694ha【1973年～40年間】

緑化施設整備計画認定制度28件6.3ha【2001年～12年間】

地区計画等緑化率条例21市54地区707ha【2004年～9年間】

緑化地域3地区60,424ha【2004年～9年間】

風致地区762地区170,724ha【1919年～94年間】

景観行政団体575団体 景観計画384団体 景観地区36地区 準景観地区3地区【2004年～9年間】

- 設置許可施設の緩和【2004年～】
- 立体公園制度【2004年～】
- 指定管理者制度【2003年～】
- 建蔽率の緩和
2%→最大34%（→参酌基準）
【1951・56・93・04・2012年】
- 緑の基本計画650市区町村【1994年～19年間】
- 管理協定1地区【1994年～19年間】
- 緑地管理機構5団体【1994年～19年間】
- 市民緑地172地区99ha【1994年～19年間】
- 地区計画等緑地保全条例
1市2地区38ha【2004年～9年間】
- 緑地保全地域0ha【2004年～9年間】

公園緑地行政
140年の
歩みと成果

緑を取り巻く 30年の動向

